論説

ヤングケアラー

宮武 剛

みやたけ・ごう　NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院理事長

がんばるのはどっちだ

「10代の介護を考える」というセミナーが東京・上智大学で開かれたのは2013年10月。「ヤングケアラー」の窮状を訴えた、おそらく初の試みであった。

Eテレ「福マガ」（福祉マガジン）の編集長だったころで、参加者のX君（当時25歳）の話を録画するため仙台市内の自宅を訪ねた。

働く母親に代わり16歳から認知症の祖母の介護を続けた。「自宅で暮らしたい祖母の願いを大事に」。だが、ご飯に砂糖が山盛り、トイレが汚れてめちゃめちゃ。疲れ果て身長170センチで体重42キロ、母親はもっとひどく165センチで38キロ。やがて高校を退学し、母親を失望させた。

「友人に話しても理解は無理で暗い気分にさせるだけ」「介護職になれば、と助言されるが、育児ノイローゼの母親に保育士を勧めますか」。

最後に祖母はグループホームに入って亡くなった。

澁谷智子・成蹊大教授から編著「ヤングケアラーわたしの語り」（生活書院）をいただいた。当事者7人が手記を寄せ、1人はあのX君だった。

手記には、泣きたくなる日々や歯を食いしばる体験がびっしり詰まっている。

「食事は肉が生で出され、麻婆豆腐の素がそのままお皿に出されただけ、つまり豆腐は入ってない」「疑問を捨て、感情を捨て、普通の生活のために淡々とロボットのように生きる」「一つお母さんのための用事をやったら、一つ自分のためのことをする」（高次機能障害と片まひの母親を介護する女子大生）。

「僕は大学生活の大半を介護に費やした」「面接官からしてみれば、何もしていなかった怠惰な学生と同然で面接はことごとく落ちた」「本当に誰にも相談できなかった」（難病の母を介護し、現在はヤングケアラーの就職支援などの会社を起業）。

X君も就職活動で、「介護体験は、働く上で特に意味はない」と言われながら、「ケアを必要とする人とケアをせざるを得ない人たちが置き去りにされない社会が来るといい」と、冷静に結んでいた。

10年近い歳月が流れ、今年4月、政府による初の全国実態調査がまとめられた。公立の中学2年生の5・7％、高校2年生の4・1％が「世話している家族がいる」と答えた。「誰にも相談した経験がない」のは中2で67％、高2で64％に上る。5月には厚生労働省と文部科学省が家事支援、交流サイト活用の相談体制などの創設を検討する報告書をまとめた。

やっと出発点に立てた。力強く踏み出せるか。「がんばれ」と励ますべきは、ヤングケアラーより、むしろ政治・行政側である。

（本紙論説委員）